

卒後ワークライフバランスについて考える会 2015年度ブロック担当会議  
意見交換議事録

テーマ

「地域における女性医師支援ネットワークづくりに役立つ参考事例(香川版・島根版)」

牧野 伸子 (大阪10期 自治医科大学  
公衆衛生学部門)

大学の中の動きについて、女性医師支援担当は卒後指導委員会、地域医療推進課と常時連携して卒業生・学生等にアプローチしている。中心的役割を持つ女性卒業生には地域の卒業生の顔が見える位置で、女性卒業生の日常のふとした問題に対応いただくアドバイザー的な役割をお願いしている。



今回の会を開催するにあたり出席する女性卒業生から事前に会のテーマを募集した。「地域で頑張る女医に直接フィードバックできる内容、困った時の相談先やネットワーク作りの取り組み」について伺いたいと意見があり、今回の全体討論の内容を検討した。

47都道府県で共通したシステムを作り上げるのは現段階では困難であるが、前段階として先進的に取り組んでおられる県の事例の発表を行い、それぞれの県に持ち帰って参考としていただきたいと思う。

【参考事例発表：①十枝めぐみ (香川13期 綾川町国保綾上診療所)】

★資料：サポートフロー図 (香川版)

《女性卒業生の集まりの会について》

- ・既存の香川県人会メーリングリストを利用して卒業生の集まりの会を綾上診療所併設の総合施設において今年10月実施予定 (本学卒業生と結婚された香川大学女性医師参加予定)
- ・女性医師をパートナーに持つ男性医師も増えていることから男性医師にも是非参加して欲しい
- ・女性医師に限らず男性医師を含めたワークライフバランスに配慮した会が今後必要
- ・集まりの会では女性医師ならではの地域での活動や取り組みについて伝えて、多様な働き方があることを知ってもらいたい

○若い女性医師や学生の不安を和らげられるようなサポートを目指す

《代診体制に関する現在の取り組み状況》

- ・産休の際に自治体の負担で代診に来てもらうことに負い目を感じることもある
- ・以前、県立中央病院から代診に来ていただいた際の費用は無償だった
- ・県から自治体に派遣されている卒業生が産休をとる際は、県立中央病院から代診に来

ていただくシステムが確立されれば卒業生の不安感を少し取り除くことが出来る  
⇒現在、香川県庁と代診システムについて話し合いをしている

○女性医師支援システムについて、前述の女性卒業生の集まりの会で話し合いを行い、その結果を文書にして県庁に提出予定

**【参考事例発表：②白石 裕子（島根17期 隠岐島前病院）】**

**★資料：サポートフロー図（香川版）**

《女性卒業生の集まりの会について》

- ・卒業生の勤務のことなどを話し合う場として、島根県主催の地域医療会を年2回開催している。
- ・2年前、大学が島根県を訪問したことがきっかけとなり、地域医療会の前段に女性卒業生によるランチ会開催の話がでた。9名の先生が集まり今年7月に開催した。
- ・次世代の育成の協力者に日高美佐恵先生（23期：島根大学医学部）がおられる
- ・一学年3名女子学生の学年もある
- ・自分のキャリアに不安をもつ学生や卒業生がいる

○女性卒業生によるランチ会は今後も開催予定

《女性が働きやすい環境づくりについて》

- ・隠岐島前病院では女性医師が働き易くなるよう女性更衣室や当直室、シャワールームの整備を検討している
  - ・地元大学や市民病院においても、女性に優しい取り組みのPRを積極的に行っている
- 地域における女性活躍に向けた取り組みや働きやすい環境整備を社会全体として開始

牧野 伸子

おふたりのスライドの左端に共通する「町おこし」は、行政が地域をアピールする際に活躍する女医の存在を最たるアピールとしていることが分かり、ひいては地域のメリットにつながっていることから、スライドに盛り込むこととした。

**【質疑応答】**

新井 由季（栃木25期 那須赤十字病院）

香川・島根の取り組みを聞いて進んでいる印象を受けた。子育てが一段落付く世代の女医がいない県はどうやっていけばよいか。

牧野 伸子

この会は今回で3回目となり、名前も新たに“ブロック担当会議”としたが、これまで会の名称を“ブロック担当”としなかったのは、役割が先にあってもそれに沿っていきける段階にはまだないと判断したからである。今後は“ブロック担当会議”の名称を使うことになるが、都道府県毎だけでなくブロックでも支援の輪が進むような道筋ができる

ことを期待して称している。

県独自で取り組みを進められるかどうかは県毎に事情があるので難しいが、その場合はブロック単位でサポートできればと思う。

白石 裕子

以前、東北地方、北関東は音頭を取る卒業生が少ないかもしれないという話になった。文化的にも北日本の女性は控えめなのかもしれないし、東北の震災支援に行った時も圧倒的な医師不足を感じた。医師自体が少なく余裕が少ないというものもあるかと思う。ただ、皆仲間なので県内に女性医師がいなければ私たちを頼ってほしい。

### **【意見交換】**

十枝めぐみ

先日、岩手県人会に呼んでいただく機会があり女性医師について講演を行った。「元気な女医を呼びたい」という意図があって、岩手県人会の先輩女医が自分のことを推薦した。聴き手は全員男性卒業生だった。女性は日中は子どものことなどでなかなか出てこられないため講演会には参加できなかったのだと思うが、夜の懇親会からは顔を見ることができた。岩手県人会の印象は結束が強固で仲が良いという印象だった。また、県人会自体が女医の話聞く姿勢を持っていることにこれまでとの変化を感じた。今まで関心のなかったところに、男性も一歩踏み出そうとしていた。控えめと言われる東北や関東の女医も男性医師に後押ししてもらったらできるようになるかもしれない。会では男性が見守ってくれているような雰囲気を感じた。男性も巻き込んで、助けを求める声を出していればおそらく動いてくれる人はいる。男の人は言わないと分からないが、言ったら分かってくれる人がたくさんいる。そのためには小さな声でも伝えていくことが大切。

白石 裕子

助けを求めることも能力のひとつである（＝受援力）。特にこの力は女性は持ちやすく、中年の男性は持ちにくいように思う。「これをやってほしい、なぜなら〇〇だから。」という伝え方はとても有効なのでぜひ試してみてください。

横谷 倫世（奈良21期 医）土庫病院）

自分は奈良県で3人目の女医で、現在長男は11歳になった。義務年限中はよかったが義務終了後、病院勤務の外科医になったときに当直や夜間の手術もあり両立していくのが大変だった。勤務形態を持続可能なように考慮してほしいと当時の管理職の医師に相談しても、10年前はなかなか理解を得るのが難しかった。子育てと両立しながらの勤務にまだ、全体的な理解が乏しい職場で、労力を使っても何も変わらないと思い、その時は医局人事で病院を転々とした。現在の病院は常勤外科医の人数が多く、当直なし、緊急の呼び出しも順位が低く勤務しやすい。その代わり雑用を引き受けたり、手術には入れる回数も、ほかの医師よりは少ないという面もあり、自分が望む最良の形とは言えないが、同じ病院で

外科を続けることができている。その間に、管理職の先生も入れ替わり、10年前であればすぐにはねのけられそうなことも、少しは聞いてもらえるようになった。病院も常勤医師がひとりでも多くいた方が助かるという意識がでてきた。周囲の環境が、あまりに整っていないときには、無理に正面から改善を求めず、しばらく自分のキャリアをつなぐというのが賢明なこともあると思う。

#### 濱舘 香葉（青森県25期 八戸市立市民病院）

東北の女医の話があがったが、そもそも東北は医師不足である。青森県の卒業生は義務年限が終わると県を退職してしまう。また、結婚協定を結んでいる卒業生は義務明け後、他県に出てしまっても医師は増えず、何年経っても変わらない。自身が出産したときも、これまでの女医と扱いは同じで今まで同様働いてもらおう、と強く言われたのを覚えている。もう少し時間がかかると思う。

#### 小島 華林（青森24期 自治医科大学医学部小児科）

同じ青森出身の卒業生として、青森県内の卒業生の中では働き方に男女の差はない。先輩の女医は子を4人抱えかなり頑張っていた。私自身は、女医だから行かないだろうと言われていた診療所にあえて志願し勤務した。妊娠した時も近隣の医師は、非常に優しくいろいろと助けていただいた。青森県の実情としては、厳しい環境で辞めていく医師は多い。県の担当者の考え方もまずは医師の働きやすさというより、医師数確保が念頭にあるように感じている。男女問わず医師が働きやすい具体的環境のアピールをし取り組むことも重要であると感じる。

#### 山本さやか（宮城25期 自治医科大学医学部附属病院臨床検査部）

25期だが宮城県では3人目の女医となる。話を聞いてきた西日本と比較すると、女性卒業生の層の違いを感じる。東北は女性医師の層が薄く、さらには医師不足の現状がある。

自分自身は、時期的に自治医大医師が不足していた頃に内科をしており、妊娠が分かると休みを取ってでも内科勤務を継続してほしいと要望があった。義務中は育児休業を取得させていただき2人出産できた。自分が育休を取得したことで実績を作れたのでそこは良かったと思っている。自分の後は女性が続かず、現在、義務を終了しているのは自分を含めて3人。そこに層の薄さを感じるが、宮城県に関して言えば、女性卒業生のあり方・立ち位置を確立していくのはこれから。今は学生のほぼ全学年に女子がいて、彼女たちの年齢層が上がってくると活躍できる場を作っていく時期になると期待している。

#### 石川 鎮清（自治医科大学医学部医学教育センター）

香川・島根県にはキーパーソンとなる男性医師がいる。ワークライフバランスに理解がある、積極的にはやらないが声を掛ければ動いてくれる男性医師はいると思う。自然と目をかけてくれる男性医師もいるし、助けを求める相手を見て伝えたら良いように思う。

#### 定金 敦子（福岡県22期 財）放射線影響研究所）

男性に頼むことに加えて、女性が偉くなることも方法のひとつかと思う。日本の人事制度では、年齢があがるにつれてその意識がなくても昇任し役職が付いていく。自分自身もその道を閉ざすか、管理職を受け入れるか日々悩み葛藤している。今までは女性が出産して仕事を続けることが大変という時代だったが、次の時代として昇進を受け入れることを考える時期なのかかもしれない。本人にとっては大変だが、そういった人が増えるのは後進にとって有難い。

#### 濱舘 香葉

青森県の男性医師で、手をあげたら応えてくれるのは八戸市立市民病院の今 明秀先生（6期）。八戸市立市民病院は働きやすい病院だと思う。

自分が研修医の時は青森県立中央病院に院内保育があったが研修医が終わるときになくなった。八戸市立市民病院は今先生の「女性が働くには院内保育だ」の声があり今年出来る。青森県全体でみても卒業生にとって厳しい状況にある。

#### 渡邊ありさ（埼玉県24期 鳥取県国保日南病院）

昨年までは鳥取大学医学部に勤務していたが、女子学生の考え方は二極化しているように感じた。将来の家庭を重視するために今後どの専門を選択すべきか尋ねてくる学生がいる一方で、最短で専門医取得を目指したい、バリバリ研修もしたい、そのためには早く県外に出ないと…と考える学生もいる。

自分が学生の頃は、心配がなかったわけではないが今の学生ほど深刻には考えておらず、同じような境遇の先輩もいるし、なんとかなるかと考えていた。

今の学生は不安が多いし、そのために準備もしたいし、制度もそろってほしいと、心配事が多くその分欲求も多い。そのような中、先輩の話を聞ける機会は学生には特に重要だと思う。県やブロック毎の取り組みを発信していく必要性を感じる。

#### 影向 一美（新潟24期 県立新発田病院）

県内に男性のキーパーソンがいるのはうらやましい。また、SNS や女医ランチ会、メーリスなど女医同士で意見交換できる機会があるのが非常にうらやましく思う。新潟は女性卒業生が少なく、県人会でも女性が集まらない。そこで、ランチ会からまずは行ってみたいと思うが、どうやってメーリスを立ち上げたか伺いたい。

#### 十枝めぐみ

県人会のメーリスがあり、歓送迎会のおしらせを流したり、男性医師はゴルフコンペの案内を流したり、症例の相談をそこですることもある。去年はそこに情報を載せたところ反応があった。今年の秋にも2回目の開催を予定しており、そのメーリスに情報を載せたが、返事は良好で上手く機能している。既存のもので、活用されていたものを使っているのがあまり抵抗なく利用することができている。

### 白石 裕子

島根県のメーリスはかつてはあったが、現在は活用されていない。2年前はラインで連絡を取り合っていたが途切れてしまった。

6月に開催した際は、日高美佐恵先生（23期）が木村清志先生（4期）に卒業生のメールアドレスを聞いて、一斉送信で連絡を取ってくれた。義務内の女性は結婚協定で島根に来ている人も含めて9人いて、それぞれが地域に散らばる中で各人の思いを共有することができた。臨機応変にできるのも女医の良いところで、都合がつけば学年が離れていても声をかけたら来てくれる。緩く次に繋げていければいいのではないかと思う。

### 影向 一美

新潟にも県人会のメーリスがあったと思う。また、県庁の神田健史先生（22期）にもお声掛けしたいと思う。

### 石川由紀子（静岡17期 自治医科大学医学部総合診療部）

静岡県人会は、あだなで呼び合ったりして上下関係が良い意味で薄れている。1年に1回旅行にも出かけたり、卒後も結婚式に呼んだり関係は良好である。

義務終了後は県を離れ申し訳ない思いがあり、県人会に顔を出すのは敷居が高かったが、3年前に思い切って夏の研修に行ってみたら、女性も数名いて、学生や義務中の卒業生ともネットワークが生まれるきっかけになった。ランチ会などちょっとしたことから繋げていってほしい。

### 十枝めぐみ

ランチ会は、去年メーリスを流したら日曜の昼がやりやすいと回答をもらった。土曜の夕方案もあったが、日曜の昼の方が子どもを預けるにしても実家に預けていきやすく、子どもを連れて行くにしても動きやすいという理由で今年も同じく、昼の案で検討している。おいしいお弁当を用意して「お話ししましょう」と声をかければ女性は集まりやすいと思う。

### 牧野 伸子

ブロック担当という考え方についてご意見いただきたい。

### 十枝めぐみ

子どもの手が離れた今だから動きやすく、こういった会にも出やすくなった。子育て真っ盛りの先生は家庭も仕事も忙しく今が一番大変な時期だから難しいと思う。10年前にこういった話があったら断っていたかもしれない。

今はメーリスなどもあるので、それで声をかけて一步踏み出すこともできると思うし、子育てが一段落したところで動けるようになることが望ましい。

20年前、診療所に赴任した際は「女なんかいらん」と言われた時代だったので、今の

社会は隔世の感がある。昔はいっぱいいっぱいであってよかったと泣いてしまったこともあったが、月日が経つにつれて凶々しくなっていたように思う。「出る杭は打たれる」時代から「出過ぎた杭には届かない」時代になるには年月がかかる。皆さんが“ブロック担当”と言われてどうしようと思う気持ちはよくわかるので今すぐどうこうではなく一歩踏み出せるところから動き出してもらって、構えずにちょっとした気持ちでいてよいのではないかと思う。

#### 白石 裕子

女性医師支援に関して先進的な地域と言っていた。実際は、離島で毎日をただひたすら過ごして来ただけの気持ちである。子育てをしながらも日常の仕事を地道に続けることが1番大事だと思うし、毎日色々大変なことがある中で医師の仕事を続けていくというだけで評価していただけるのは大変有難い。

ブロックについては続いてくれそうな後任の目星が付き、中国地方は他県に仲間もいる。ブロックに限らず世代が移り変わる中で色んな立場の人が色んな意見を交換できることが素晴らしいと思っているので、いつまでもここに来たいと思いつつ、世代交代もしていかなければならないと思っている。

#### 横谷 倫世

長男は11歳になって末っ子は4歳になった。同じ生活が10年続いているが、以前と比べて自分も慣れてきて上手く立ち回れるようになったり、後輩医師から相談を受けたりしている。代表はできないが、相談される存在として期待されているのだと理解している。ブロックの中の県によって義務年限中の状況は異なるので、奈良県内であれば担当できる。

#### 定金 敦子

各都道府県毎の制度の違いに加えて、県の歴史を知った上でないと支援は進まないができることがあれば協力したい。

#### 影向 一美

会に来るとモチベーションがあがり、そのモチベーションを1年間維持し続けるのも大変だがまた1年間頑張ろうと思える。県内の女医にフィードバックできずにいることをもどかしく思っていたが、ランチ会であったり、県庁の神田先生に繋いだり、義務内の県内の女医に繋げてフィードバックできたらと思う。この会に興味を持っている同級生もいるので広めたり一緒に仲間になっていけたらよいと思う。

#### 渡邊ありさ

埼玉県と鳥取県の2県で勤務したことはブロック担当としてのメリットになっている。ブロック内でも県によって制度は異なるが、自分の県の状況を他県に伝えられることもブロック担当のメリットであると思う。

自治医大の女性をサポートしていくことは地域枠の女子学生にとっても働きやすい環境

を整えることに繋がるし、地域卒の学生たちが地域派遣になると自治医大の卒業生もだいぶ楽になると思うので、そういった意味でも良いことかと思う。バリバリ働きたい地域卒の学生にとっても、楽しく働きたい地域卒の学生にとっても地域卒であることは重荷のようだが、地域の方が働きやすかったり両立しやすかったりした経験があるので伝えていきたいと思う。

#### 新井 由季

2人目を出産したあとから県人会の理事も務めたが、3人目を出産するにあたって役職を外していただき、県人会からは離れている。当直の度に夫に時間休を取ってもらっているので、夜の会議に出席する為に夫に頼むのは気が引けていた。この会は子どもの送迎に影響しない日中に開催されるので有難い。県人会もそろそろ参加し、県内の様子を見るところから始めたいと思う。

#### 濱舘 香葉

上手く働くコツとして県人会があると思っている。学生時代に県人会で頻繁に交流していたが、そのときの関係が現在に活かされている。義務内中に県の人事を担当していた男性の後輩医師から、出産する義務内の女性医師がいるので先生の経験を教えてほしい、と相談を受けたことがあった。県職員を退職して県人会に関わることは少なくなったが、八戸市立市民病院は研修医も含め女性医師が多い。女性医師の問題に関して男性を通じて調整を取る機会が多くなった。当院で初期研修中の他大卒医で自分が頑張る姿を見て頑張ろうと思ってくれた医師がいた。ここ最近は県人会に還元できることが少なかったが、少しでも県人会や近場の県に協力できたらと思う。

### **【まとめ】**

#### 牧野 伸子 卒後指導副部長

年齢と共に仕事は増えるが自信を持ってお引き受けできるものはひとつもなく、すべてお断りしたいと下を向きながら、でもなんとなく子どもを育ててきて何かを育てなければならぬというクセがついているのか、お断りすることができず日々悶々として過ごしている。自分はそのような折であるが先生方には“ブロック担当”という言葉は重く捉えないていただきたい。新しいことに取り組むのではなく今のままの姿、動きで気負わず引き受けていただけたら幸いである。

そうはいつでも事情があるので今は他の人にやってもらって、また時間ができた際に…といった考え方もあるので、その場合には改めてご連絡いただき、後任の推薦をいただければと思う。

この会の位置づけは“企画”である。女性医師の集まりは皆で共有し合う場は多いが、前に進む力を出すことは少ないように思う。去年のこの会の集まりの時は、参加者から自然に企画の力を出していただき、共有し合う中で次の一手が見えてきて今回の会に繋がっ



ている。

この先、担当が外れたとしてもアイデアを出していただき皆で考えていければと思う。将来的には10ブロックだけでなく全国バージョンとして広がっていくことができれば幸いに思う。

### **【閉会挨拶】**

本間 善之 卒後指導部長

出身の富山大学医学部は女子学生が多くなり、男が多かった自分の時代と比べてずいぶん変わったと感じている。

女性医師支援の試みは全国各地の大学や国でも積極的に行い試行錯誤しているが、理想論が多く実行が伴っていない印象を受けている。

これまでに3度、会が設けられてきたがノウハウも蓄積されてきたところで、牧野先生、石川鎮清先生をはじめとして、卒業生がなんとか義務年限を果たしていただきたいと思う。

# 卒業女性医師の地域におけるサポートフロー図（香川県）

地域

地域にいる中心的役割の  
女性卒業生

十枝めぐみ先生(13期)

綾上診療所 所長

香川大学医学部臨床教授

東京女子医大地域医療研修指導

「香川の中心で地域医療を叫ぶ」

相談

アドバイス



地域にいる女性卒業生

義務年限中：7人

義務年限終了後：13人

女性医師ワークライフバランス懇談会（年一回）

- 地域診療体制別の子育てサポート情報の発信
  - 代診体制に関する情報提供・依頼の確認
- 県立中央病院へき地医療支援センター  
川田洋一先生(6期)

新鞍誠先生(9期)

ロールモデルとしてのstimulation

町おこし

自治医科大学

# 卒業女性医師の地域におけるサポートフロー図（島根県）

地域

地域にいる中心的役割の  
女性卒業生

白石裕子先生(17期)

隠岐広域連合立隠岐島前病院  
西ノ島町立国民保険浦郷診療所所長  
東京女子医大地域医療研修指導  
自治医科大学臨床講師 (H27.8.1より)  
小児科専門医、プライマリケア指導医、内科認定医

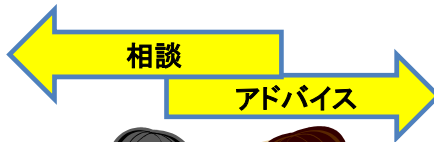
「いつも心に太陽を」「健康に気をつけて」



白石吉彦先生(15期)

増野純二先生(16期, 県立中央病院)

「ドクターG」出演決定  
「THE 整形内科」執筆



地域にいる女性卒業生

義務年限中：8人  
義務年限終了後：7人

女性医師ワークライフバランス懇談会（年一回）

- 地域診療体制別の子育てサポート情報の発信
- 代診体制に関する情報提供・依頼の確認  
県・健康福祉部 木村清志先生(4期)
- 次世代の育成：

県立こころの医療センター 塚本織恵先生(22期)  
島根大学医学部 日高美佐恵先生(23期)

ロールモデルとしての  
stimulation

SNSを通じたネットワーク  
卒業生、女子医学生

町おこし

自治医科大学